の結ばれたピンクの女の子らしい丸いハイヒールです。彼女のスポーツパンツの下に露出している足首やふくらはぎには、柔らかい透明な色合いのストッキングが反射しており、瑞希亜の外見は完全に中性的ではありませんでした。しかし、彼女の笑顔は礼節を備え、座り方は上品で優雅で、古灵の印象とは大きく異なっていました。

″これは...どういうことだ？″ 古灵の不安な予感が的中した。

瑞希亜は立ち上がり、体を引き伸ばしました。彼女のシャツは下半分が引っ張られ、くびれた女性らしい腰が露出され、肌色のタイツの端を肚子の上に高く引き上げているのがはっきりと見えます。

瑞希亜は実際にズボンの下にストッキングを履いていました。そして、言動も非常に柔らかく順従的であるようで、まるで催眠術にかかった女性のようでした。

そこで、古灵は大声で言いました。「瑞希亜、どうしたんだ？ あなたはどこにいるの？ 奈津美は？」

「ああ、そうだ、あなたと奈津美に挨拶をさせてあげたい」

カメラが切り替わり、もう一つのベッドの脇には、巫女の装束を着た女性が大文字で縛り付けられ、上半身は超透明な白の競泳水着に変えられ、赤いスカートはお尻を隠すだけの大きさに変更され、泳衣の開口部から少し乱雑な陰毛のある陰部が空気中に露わになっています。美しい曲線を持つ巫女の脚は、黒のかかとまでの細いストッキングで覆われ、致命的な誘惑力を放っていました。

″ウウ.....ウウウ.....″
カメラに映る奈津美は、風俗嬢のような淫らな姿に強制的に装われ、手足を縛られ、目を黒いストッキングで覆われ、口には数個の靴下が詰め込まれていた。彼女はもがきたかったが、首に代わりに黒いストッキングが使われた「首輪」や、体に纏わりつく亀甲縛りの拘束によって動けなかった。

「彼女に何をしたんだ!」古灵は目を疑ったが、相手には聞こえないことを知りながら大声を出していた。

「ふふふ、古灵警部補、このビデオを後で送信してくれることを願います。もし送らなかった場合は、私自身でそれをやらなければなりません... 私は、来週投票される性愛解放法案を支持します。」

「ありえない！」古灵は一瞬にして体が熱くなるのを感じたが、手足と心は冷え切っていた。

瑞希亚は催眠にかかっていた。彼女の様子はおかしく、まだ催眠にかかってい

ない奈津美を誘拐して、二人は淫らな芝居を演じている。

これは明らかに誰かに操られているものであり、その人物が二人の女性だけを演じさせるわけがない…そして、画面にもう一人登場した。

それは椅子に座り、同様にストッキングで縛られたマ議員であり、全身は裸で、手足は椅子や背もたれに縛られ、ペニスにはクリスタルショートストッキングを着用し、口は奈津美の巫女袜で塞がれていた。マ議員は肥大した腹を揺らしながらも苦悶の表情を浮かべ、もがきていた。

（なぜ、マ議員もまだコントロールされているのか？）古灵が困惑している時、瑞希亚は精霊のような美しい声を出し、「私がこの事件の黒幕であることを宣言します。世界中の人々、聞いている？」

以上です。
古灵警部補は、一貫して瑞希亚と調査を行っていた。彼女は女の子が『神官』と呼ばれる凶悪犯を追跡していることを知っており、そのために非常に大きなリスクを冒していることも知っていた。そんな彼女が黒幕であるわけがない。唯一考えられる理由は、神官に催眠術をかけられているということだ。彼女は洗脳され、背負わされた黒い罪の袋を抱えている。このことを考えた古灵は、背後から冷や汗を流した。

このビデオの意味は、明らかに本当の『神官』が逃亡しようとし、マ議員を潔白にするために作成されたものだ。

瑞希亚は普段とは異なる行動を起こし、自分の運動服のジッパーを解いた。真っ白な上半身が露出され、その体は前に出て後ろに反っており、肌のすべてが白磁器のように光沢を帯びて美しく、大きな乳房が空気中にさらされ、軽度の発情によって桃色に膨らんでいた。

「ん...気持ちいい...　性愛自由法案を推進することが正しいということがわかったようだね。」

瑞希亚は意図的に自分自身を法案の提唱者に仕立て上げ、笑顔で胸を掴んで男性を興奮させるようにした。彼女は靴とズボンを脱ぎ捨て、ウエストから足先まで透明な肉色のパンスト一枚だけを履いて美しい体を露出した。パンストの開口部からは彼女のきらめく黒い森林が覗いていた。瑞希亚は髪をかき上げ、妖艶な笑みを浮かべながら、下半身を突き出して自分の陰毛を引っ張り、粉色の秘部を露出させた。そこには二つの貝殻がしっかりと閉じられていたが、透明な液体が隙間から滲み出ていた。
「私は...セックスが好き...女性が幸せになれる世界を作る必要がある...だから、今日、マ議員は私の報酬を受け取った後、引き続き自由な性愛法案を推進するでしょう。」

そう言って、淫乱な女のように腰をくねらせながら、瑞希亜はマ議員に向かって歩いていった。彼はまだ装って「ウグウグ」と苦しんでおり、透明なストッキングに包まれた陰茎はすでに震えていた。

瑞希亜は色情的な笑顔を浮かべ、マ議員の前に跪いて、妻が夫を扱うように、丝袜越しに彼の亀頭を優しく吸った。もう片方の手は陰嚢を撫でてマッサージし、男は彼女のエロティックな挑発によって快楽を得る。彼は巫女のストッキングを舐めながら快適なため息を漏らし、透明なストッキングも次第に龜頭から分泌される液体で湿っていった。

瑞希亜の美しい瞳は次第に淫らなピンクの光沢を放ち、男性の液体に発情したように笑った。

「ああ、かわいいちんちんはもう我慢できないね。さあ、今、私は童貞をあげるよ...」

「ウグウグウグ...!」

一方、隣にいたナツミはますます不安そうにうめき声を上げ、瑞希亜の注意を引いた。瑞希亜はすぐに狡猾な表情を浮かべ、マ議員の陰嚢にキスをし、彼をベッドのそばに座らせて自分は妖艶な足取りでベッドの側に歩いた。彼女が近づくと、肉丝で包まれた腰以下の部分しか露出しておらず、この時点で脚と豊満な尻は色気の光を反射していた。

「ナツミちゃんもう待ちきれないみたいだね。大丈夫大丈夫、私はあなたの親友だから、あなたが最初に楽しんでね...」

「ウグウグ...!?」
瑞希亜はナツミの身体に覆いかぶさり、2 人の妖艶で成熟した女性の体が絡み合った。彼女は乳房を吸っている赤ちゃんのようにナツミを吸い取り、手は彼女の秘所に進出し、目隠しをされたナツミは哀れな発情音を出して受け入れ、長い足を伸ばし、何度も快感的な衝動を受けながらブラックストッキングの足首を張り、膣を引き締めた。
一方、ナツミを楽しんでいる間、瑞希亜の長い足はベッドの端に伸び、素早くマ議員のストッキングの包まれた陰茎を指で押し上げた。自分の肉丝の足裏で足を上下させ、時々つま先で陰茎を刺激しながら、男は頭を仰ぎ、卑猥な呻き声を上げ、陰茎はまた射精するかのように跳ねていた。陰茎が活力に満ち溢れても、瑞希亜はそれを脚裏の手で慎重に握り、愛する人に深い愛情を注ぐかのように持ち続けた。
「ああ、ナツミちゃんは処女なのね...だから下半身がとてもきついんだわ、でも大丈夫、私も処女だから、どうやって宮殿の扉を開けるか、よく知ってるよ...」
泣きながら悶えるナツミを見て、瑞希亜は母親のような表情を浮かべて微笑み、そばにある大きなバイブを取り出し、ナツミの股間に無情に突き刺した。ピュッと音を立てて、ナツミの下半身から水が溢れ出てきた。バイブの先端はまず

巫女の閉じた膣に入り、徐々に摩擦しながら進んでいき、最後に 20cm のバイブがナツミの下半身全体に挿入された。
「ウッ.....」ナツミは絶望的に甘美な呻き声を上げ、楽しすぎるのか苦痛なのか腰をくねらせ、透明な競泳水着には、乳首が明確な痕跡を残した。
瑞希亜はナツミの体重を押し付け、濡れた股間を愛撫し、刺激を与え、彼女の未経験の下半身をバイブで広げるようにしていた。
“奈津美，気持ちいいですか？”
「ウウウッ……！？」となった奈津美は、手足を拘束されて身動きがとれず、絶望的に瑞希亜による更なる惨劇を待つしかなかった。瑞希亜がバイブを挿入してから、先端を握って上下に動かし、巫女の性器から分泌される愛液で濡らしていた。
「ふふ、膣も色っぽく動いちゃったね。やっぱり一本じゃ足りないみたいだね…」
「ウウウッ？」と聞かされた奈津美は相手の意図を知ったように恐怖に顔を歪めて否定しようとするが、既に瑞希亜は人の陰茎よりも太いセルフバイブ第二弾を取り出していた。そして再び巫女の秘部に強引に入り込んで行った。
「ウウウッ!!!!!」奈津美は頭を振り、全身を伸ばし、泣き声のような声を出した。しかし、すぐに彼女の声は情熱的に変わっていった。なぜなら、瑞希亜がバイブを弄りながら、身体の奥深くに攻め込んできたからだ。層を重ねた肉襞は、花のように人工的に催促され、2 本の鳥根を迎え入れるために開き、蜜を股から深く流して、ベッドシーツを大量に濡らしていた。
「これでいいじゃん？姉ちゃん、お褒めの言葉、ありがとね。」
瑞希亜は色っぽく笑って、奈津美の頬に手を伸ばした。巫女は絶頂に達したため、挑発にも反応できなくなってしまった。
「やはり足りなかったのね、後ろが空いてたのね。」
「ウッ？」と、瑞希亜が彼女の尻に第三のセルフバイブを挿入すると、弱った奈津美は再び体を刺激され、泣いて言葉を発した。感度の高い膣は、表面に突起がある 2 本の鳥根を絞めつけ、愛液を浸透させていく。一方、セルフバイブが浣腸されると、清らかな結腸は抵抗することすらできず、肉壁はバイブに密着して、偽の鳥根を受け入れた。最後に、肛門のバイブも挿入された時、奈津美は全身を痙攣させ、喜びの声を上げたのだろうか…。
“ふふふ、女の子たちの身体って本当に神秘的でしょう？彼女たちはいくつのペニスを受け入れることができるか知らないわよ。”
彼女は自慰棒 3 本の先端を押し下げ、3 本の棒全てが震動しながらクリトリスを刺激した。硬い凸点が壁を抉り、奈津美の体内に深い快感を与えた。女の子は身を捩りたくても力が入らず、絶叫することしかできなかった。目隠しされた娘は「ウウウ」と泣き声を上げ、体の奥底からのマッサージロッドの振動によって高揚する。そして一連の高潮の後、女の子の身体はベッドにゆっくりと沈み込み、春の泥のように柔らかくなった。
「ああ、あなたはもうおとなしくなっちゃったわね。そんな風に可愛くなったわ。」
瑞希亜は奈津美の頬に媚びた笑顔でキスをした。同時に彼女は議員を気遣い、娼婦が客をもてなすように、低い声で話し掛けた。
「議員さん、私のご奉仕はまだお気に召していただけてますか？あなたのペニス、本当に力強くなるといいですね。自由性愛法案が通ったら、それは千千万

万の少女たちの夢になるわ。」
「ウウウッ……」
美しい少女の肉足は男性のペニスを微妙な力で踏みつけ、ストッキング越しに亀頭を責めた。そして男性は「苦痛」の声を連発し、女の子は男性の匂いを嗅ぎながら興奮を高めていった。２つの手は奈津美の巨乳を掴み、女の子は快感に耐えきれなくなり、絶叫する。彼女の足はペニスを挟んで速く動き、ついに議員の精子を出させた。彼の陰茎から白濁液が放射され、ストッキングに包まれたペニスの内部に飛び散った。瑞希亜の足も汚れ、彼女は微笑んで床に座った。そして自分の丝袜を陰茎から外して、地面に精液をこぼした。
「もったいないことをするわよ」と瑠璃亜はため息をつき、直接に精液まみれのストッキングを奈津美の小陰唇に詰め込んだ。女性の膣は驚くほど受け入れる力があり、二本のチンポが挿入された後は自然に湿ったストッキングの一組も入れられた。奈津美の体はまるで精液を感じて発情しているように、何度も痙攣した。
「素敵なチンポ、それが私が生まれた意味よ」と瑠璃亜はマ草議員に面向けて、彼の太ももの上に座った。両手で男の首を抱き、彼にキスをし続けた。ハーフ美少女が中年太った男性と激しくキスをしている光景は非常に異様だが、瑠璃亜の表情はとても情熱的で深いものになっている。
「あなたのチンポ、まだ使えるでしょう？なんでこんなに早く小さくなっちゃったの？私の中で休んでいってね。」
瑠璃亜は自分の尻を浮かせ、手で彼のチンポを支えながら、自分の濡れた下半身に向けて、亀頭は隙間を開け、正しい方向に向かって座り込む……「あっ……」女性のストッキングの美尻と男性の股間がぴったりと合わさった瞬間、チンポも瑠璃亜の身体の中に入っていった。元々萎えていたチンポも瞬間的に勃起し、瑠璃亜の表情は一瞬で変わった。彼女の顔は可愛く魅力的な桃色を露出し、湿った目で天を見つめ、桜色の唇は大きく開いただけで、呼吸するのもやっとで、何も話せなくなった。その後、彼女はしばらく震えていた。
「あぁ……あぁ……どうして……こんなに気持ちいいの……」
『うううう…… 』少女の痙攣は体だけではなく、膣の中でも起こり、生セックスによる陰唇の刺激で草議員にも装われたように悶えた。
しばらくして、瑠璃亜の目は徐々に明るくなり、彼女はマ草議員を見つめ、強引に笑った。
「ごめんね、私まだ処女だから、あんまり身体に触れるものが少ないストッキングを着ていると敏感になるの。しかし、これからは集中しようとしています」
言い終わると、瑠璃亜の手がマ草議員の肩に添えられ、大きく息を吸いながら、肉棒を引き抜いた。しかしお尻を数センチ持ち上げただけで、騎乗位で再び落とし、彼女の処女穴を大きく拡張させた。
「おぉ！！」
瑞希亜の目がぼんやりしていて、また一陣痙攣が訪れた。彼女の浮遊した肉色のストッキングに包まれた足は、電撃を受けたように震え続け、女の子の顔は赤面し、しばらく休憩をとった後、恥ずかしそうにマ草議員を見つめ、親密に彼に話しかけながら口づけた。「あなたのおちんちん、どうしてこんなに大きいの？私、好きだから……もう一回、挿れて……入るかな？あぁ……」
全身に肉色のタイツを身にまとった女の子は、男性の身体で淫乱な踊りを始め

た。彼女は男性のチンポを肉穴に飲み込ませながら、リズミカルに腰を振り、